◆ 街道探訪会３　「イザベラ・バードの歩いた道とやまびこ村」

参加者１５人午前９時にマイクロバスで月岡ホテルを出発。曇りがちで風があり寒い日であったが、幸運にも雨が降らず昼前からは薄日がさし、まずまずの天候であった。

堅磐橋

片桐繁雄さん(前上山市立図書館長)の案内で出発、ユーモアを交えた軽快な楽しい解説。イザベラ・バードの「日本奥地紀行（高梨健吉訳)」の一説「東洋のアルカディア」や「上ノ山は清潔で空気がからりとしたところである。美しい宿屋が高いところにあり、楽しげな家々には庭園があり、丘を越える散歩道がたくさんある。・・・・」等を紹介。ほどなく堅磐橋（上山市川口）に着く。明治時代に建設され、イザベラ・バードが実際に通った橋だ。一同寒風の中カメラのシャッターを切る。

中山橋

続いて中山橋（上山市中山)、吉田橋（南陽市小岩沢）もバスを降りて石橋を見学。上山市には、この他に同時期に建設された明治の石橋が楢下宿に二つ残っていて、併せて５基とも「土木県令」「鬼県令」と呼ばれた初代山形県令三島通庸(薩摩出身)がつくらせたもので、現在も使用され経済産業省近代産業遺産群に指定されている。いずれもアーチ型の見事な石橋である。三島県令の委嘱により洋画家の高橋由一が栃木、福島、山形の新道の風景を描いた２００図が残されている。

吉田橋

午前１０時をまわったところで、１０時開館のハイジアパーク南陽（南陽市上野）に到着。ここには「イザベラ・バード記念コーナー」があり、山形県というよりも日本で唯一イザベラ・バードに関する貴重な資料が見られるところである。ここには、当時南陽市が職員を英国に派遣して収集した貴重な資料が、展示されている。山形県は、平成１３年にイザベラ・バードの示唆を基にアルカディア街道復興計画を策定し、豊かな地域資源に磨きをかけ、未来につなぐ県土づくりを進めている。上山市でも、その計画の一環で楢下宿の保存活用に力を入れている。

イザベラ・バード記念コーナー

ハイジアパーク南陽を出て、小滝街道に向かう。小滝街道の名前の由来である小滝を見ていこうと、片桐繁雄さんの発案で途中立ち寄ることに。橋の上から滝を眺めると、文字通り小滝である。近くに直売所があり、産直の野菜やキノコを買い求める参加者。小滝を過ぎるとすぐ小滝街道（現国道３４８号）に入る。古くは、米沢から山形への街道の要衝であった。現在はトンネルの新道であるが、敢えて旧道の小滝峠を通る。峠を越え、やまびこ村を俯瞰すると、「ウワァー」という歓声があがる。

やまびこ村に到着し、すぐに古街道を歩く。要衝の街道であったとはいえ、羊腸の小径を

山元の古街道

通行する往時の苦労を一瞬味わうことができた。
いよいよ山元のそばまつりに参入。山元の地でとれたそば粉の三たて（挽きたて、打ちたて、茹でたて）のそばとかい餅を、かつての山びこ学校体育館でごちそうになる。一際おいしい。その後は、山元地区公民館の長橋榮次館長より山元村の歴史を伺い、館長自身が保管している殿様の衣装など貴重なものを拝見。どうしてこの村に古い史跡がいたるところにあるのかという謎が解決。室町時代以前には米沢と山形を結ぶ街道の要衝であったとのこと。

山元そばまつり

長橋榮次館長

午後１時山元を出発、長谷堂城址を横目にして、みはらしの丘を経由、旧羽州街道の二軒茶屋跡を見学。向かい合って二軒の茶屋があったので二軒茶屋跡というそうで、現在は井戸の跡が残っておりました。このすぐそばに新明神社があり、境内の東端に立つと山形市街地及び蔵王連峰が一望できるビューポイントで一同記念撮影。さらに南進すると旧羽州街道の地蔵堂、かつて上山領境界で標柱が立っていた地点で上山と山形の領境界であったところを車中より眺め、２時前に無事月岡ホテルに到着。参加者は大満足の様子でした。

（山口登市　記）

二軒茶屋跡にて

新明神社境内にて　一同ニッコリ

日本奥地紀行（抄）　イザベラ・バード

高梨健吉訳

りとしているところのつづいわれる。もしここが外国人の容易に来られる場所であったら、美しい景色を味わいながら各方面にここから遠足もできるから、彼らにとって健康的な保養地となるであろう。

この街道筋は、日本旅行の大きなルートの一つとなっている。温泉場を訪れて、彼らの風習や娯楽、そして日ヨーロッパから何も採り入れていないのにまったく完璧な文化を観察するのは、興味深いことだ。ここの温泉には鉄が含有されていて、硫化水素が強くしみている。私は三ヵ所で温度をためしたが、一〇〇度、二〇五度、二七度であった。この温泉はリューマチによく効くといわれており、遠くから湯治客が来る。私がしばしばものをたずねた警官の話には、湯治のためにここに滞在している人の数は六百近くで、毎日六回入浴するのがふつうだという。他の病気のときもそうだが、リューマチの場合に、旧式の日本の医者は食事や生活習慣にほとんど注意を払わず、薬や外部の手当てに多く注意を払っているように思う。彼らが柔らかいタオルで軽くなでる代わりに力強く摩擦するようにしたら、薬や温泉の効果もずっと増すであろうに。

これは大きな宿屋で、客が満員である。宿の女主人は丸ぽちゃのかわいい好感を抱かせる未亡人で、丘をさらに登ったところに湯治客のための実にりっぱなホテルをもっている。彼女には十一人の子どもがいる。その中の二、三人は背が高く、きれいで、やさしい娘たちである。私が口に出して賞めると、一人は顔を赤く染めたが、まんざらでもないようで、私を丘の上に案内し、神社や浴場や、この実に魅力的な土地の宿屋をいくつか見せてくれた。私は彼女の優美さと気転のきくのにはまったく感心する。どれほど長いあいだ宿屋を経営しているのか、と未亡人にたずねたら、彼女は、誇らしげに「三百年間です」と答えた。職業を世襲する日本では、珍しくないことである。

私の泊まった部屋は、一風変わっている。ありふれた大きな庭の中の蔵座敷で、庭に浴場がある。一〇五度のお湯が中に入るようになっていて、私はそのお湯に心ゆくばかり浸る。昨夜は蚊がひどく、もし未亡人とその美しい娘たちが一時間もがまん強く扇であおいでくれなかったなら、私は一行も書けなかったであろう。私の新しい蚊帳はとても具合よく、ひとたび中に入れば、外でぶんぶんうなっている血に飢えた蚊どもの失望した様子が見えて楽しい。

未亡人の話では、旅館主は看板料として一度だけ二円を払い、毎年の税金として一流の宿屋は二円、二流館は一円、三流館は五十銭を払う。酒を売る許可料としては五円で

間からのぞいていた。耕作の様式については、少しの相違点も見られない。吉田は豊かに繁栄して見えるが、沼は貧弱でみじめな姿の部落であった。しかし、山腹を削って作った沼のわずかな田畑も、日当たりよい広々とした米沢平野と同じように、すばらしくきれいに整頓してあり、全くよく耕作されており、風土に適した作物を豊富に産出する。これはどこでも同じである。草ぼうぼうの「なまけ者の畑」は、日本には存在しない。

私たちは馬に乗って四フィート幅の道路を四時間ほど、これら美しい村々を通って進んだ。すると驚いたことには、渡し船で川を越すと、津久茂で、地図では副道となっている道路に出たが、この道路は実際には二五フィートの幅があり、よく手入れがしてあり、両側に堀が掘られており、道に沿って電柱が並んでいた。またたく間に新しい世界に出てきたのである。道路は何マイルにもわたって、りっぱな身なりの歩行者、人力車、駄馬、あるいは荷車で混雑していた。荷車は中実車輪をつけたものか、あるいはタイヤなしで輻をつけた車輪のものであった。それはすばらしい馬車道路なのだが、馬車は走っていない。このように文明化した環境の中で、二人か四人の赤銅色の肌をした男が車を引く姿を見るのは、奇妙なものであった。しばしば夫婦者が――男は裸で、女は腰まで脱いだ姿で――車を引くのを見た。それと同時に、上には電線が走り、下には日よけの笠と扇子しか身につけぬ男がいる姿は、同じく奇妙な組み合わせに感ぜられた。また子どもたちが、本と石板をもって、学課を勉強しながら、学校から帰る姿もあった。

赤湯という硫黄泉の温泉町で、私は眠りたいと思ったのだが、これほどうるさいところは今までにあまりなかった。四つの道路が合する最も賑やかなところに浴場があって、大きな水音を立てて男女の人々があふれていた。すぐ傍に宿屋があって、約四十の部屋があり、その大部分は数人のリューマチの湯治客が畳の上に横になり、三味線をかき鳴らし、琴をきいきい弾き、その騒音にとてもがまんできなかったので、私はここへやってきたのである。ここはそこから一〇マイル離れたところで、りっぱな新道を通って、興味ない水田と低い丘のある広い谷間を登ってくる。すると砂利の多い高い丘に囲まれた小さな平野が眼前に開けてくる。その丘の傾斜地に上ノ山の町が心地よく横たわっている。人口三千を越す温泉場である。今はお祭りの最中で、どの家にも提灯や旗が出してあって空気がからりとしたところである。美しい宿屋が高いところにあり、楽しげな家々には庭園があり、丘を越える散歩道がたくさんある。ここは日本でもっとも空気がからある。

これらの蔵（東洋に来ている英国人はゴダウンと呼ぶが、マレー語のガドンから来た語）は耐火性の倉庫で、日本の町の中で最も目立つ特色の一つとなっている。他がみな灰色の中でこればかりが真っ白いために、これだけはしっかりと丈夫であるからである。

私は蔵の階下の部屋に逗留している。しかしその鉄の扉は開いたままで、夜になるとそこに障子がたてられる。私の部屋には少しばかりいろいろなものが置いてある。二つのりっぱな仏壇があり、そこから二体の仏が冷静な顔をひと晩中のぞかせている。一体は、女神観音の美しい像で、もう一体は尊い長寿の神の像であったが、これらが私に奇妙な夢を誘った。

第十九信

金山にて　七月十六日

すばらしい道を三日間旅して、六〇マイル近くやってきた。山形県は非常に繁栄しており、進歩的で活動的であるという印象を受ける。上ノ山を出るとまもなく山形平野に入ったが、人口が多く、よく耕作されており、幅広い道路には交通量も多く、富裕で文化的に見える。道路の修理は、漢字の入ったにぶい赤色の着物を着た囚人たちがやっていた。彼らは土建業者や、百姓に雇われて賃銀をもらって働いているから、英国の仮出獄人に相当するものである。彼らは、囚人服をいつも着ていなければならないということ以外は、何も制限を受けていない。

坂巻川で私は、初めて近代日本の堅固な建築――すばらしくりっぱな石橋で、ほとんど完成するところであった――を見て、とても嬉しかった。私は、奥野仲蔵という技師に自己紹介をした。彼はとても紳士的で、愛想のよい日本人であった。彼は私に設計図を示し、一生懸命に説明をしてくれた上に、私にお茶と菓子を出して接待してくれた。

山形は県都で、人口二万二千の繁昌している町である。少し高まったところにしっかり位置しており、大通りの奥の正面に堂々と県庁があるので、日本の都会には珍しく重量感がある。どの都会も町はずれはとても貧弱だが、新しい県庁の高くて白い建物が低い灰色の家並みの上に聳えて見えるのは、大きな驚きを与える。山形の街路は広く

て清潔である。良い店があって、長く軒をつらねて装飾的な鉄瓶や装飾的な真鍮細工しか売っていないものもある。日本の内陸を今まで通ってきたが、ヨーロッパの食物や飲物、特に飲物のひどいまがい物だけを売っている店があるのには当惑する。日本人は、上は天皇から下に至るまで、外国の酒類を愛好している。ほんものの酒類であっても有害であろうに、硫酸塩、フーゼル油、悪い酢などの混合物であるときには、ずっとひどいものである。私は山形で、最上種の商標をつけたシャンペン酒を売っている店を二軒見た。マルテルのコニャック、バース・ビール、メトクとセン・ジュリアン酒、スコッチ・ウィスキーだが、原価の約五分の一で、すべてが毒物混合品である。この種の販売は禁止すべきである。

政府の建物は、ふつう見られる混合の様式ではあるが、ベランダをつけたしているので見ばえがする。県庁、裁判所、そして進歩した付属学校をもつ師範学校、それから警察署はいずれももりっぱな道路と町の繁栄にふさわしく調和している。大きな二階建ての病院は、丸屋根があって、百五十人の患者を収容する予定で、やがて医学校になることになっているが、ほとんど完成している。非常にりっぱな設備で換気もよい。しかし私が視察した現在の病院については、それほど良いとはいえない。裁判所では、二十人の職員が何もしないで遊んでいるのを見た。それと同数の警官は、すべて洋服を着ており西洋式の行儀作法をまねしているので、全体として受ける印象はまったく俗悪趣味である。彼らは私にまず旅券の呈示を求めてから、ようやく県とこの市の人口を知らせてくれた。一度か二度、伊藤の態度に不作法なところがあるのを見たが、山形の警官の態度が警官にふさわしいものだろうか、と彼は、私に二度も聞いたのである。

山形の北に来ると、平野は広くなり、一方には雪を戴いたすばらしい連峰が南北に走り、一方には側面にところどころ突き出た断続的な山脈があり、この楽しく愉快な地域を取り囲んでいる。ほれぼれとして見たくなるような地方で、多くの楽しげな村落が山の低い裾野に散在している。温度はただの七〇度で、北風であったから、旅をするのは特に愉快であった。もっとも、天童から先、三里半も行かなければならなかった。天童は人口五千の町で、ここで休息するつもりであったが、貸付屋（貸座敷）でない宿屋はすべて蚤蚕のためにふさがっており、私を受け入れることはできなかった。

翌日もやはり同じりっぱな道路を進む旅であった。農村や、トチイダ（土生田）と尾花沢のように千五百や二千の人口の町が続く場合がしばしばあった。この二つの町から鳥海山のすばらしい姿が眺められた。雪におおわれた杜大な円頂で、八〇〇〇フィートの

小松（川西町）発［１８７８（明治１１）７／１５（月）～１６（火）　米沢平野＝まったくエデンの園・・・アジアのアルカディア
赤湯　⇨　上山＝人口３０００を越す温泉場［翌日山形へ］⇨　坂巻橋工事・・

イザベラ　バードのとおった道

番号は、通った順です。

⑦坂巻、常盤橋

⑥早坂新道

⑤堅盤橋

中山橋

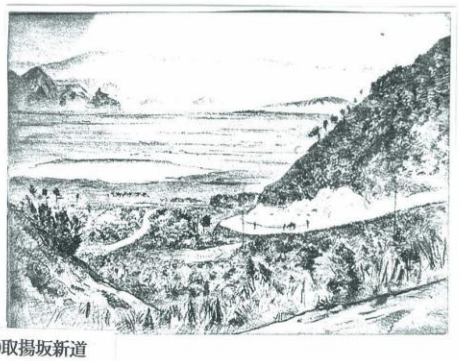
中山橋は中山地内を走る旧国道が、カラジュク川を横切る所に架けられたアーチ式の石橋で、親柱には「奈可やまはし」と陰刻されている。この石材は中山石と言われる凝灰岩で、明治十三年に竣功している。この年は山形県令三島通庸によって、栗子山にトンネルが掘られ笹谷新道が開通した年でもあり、それと関連があったものと考えられる。

橋の長さ一一・三m、全幅六・七m、アーチの高さ四・三m、河床部での径は五・八mでアーチの部分を構成する石組みは二重になっており、その上に積まれた石の層も厚く極めて堅牢に造られている。後世一部補強はされているが、明治初期の洋風土木技術の結実した貴重な文化遺産として保存されているものである。

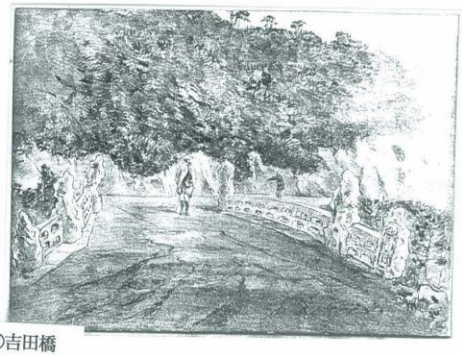
3

32

④隠れ石



①取揚坂新道

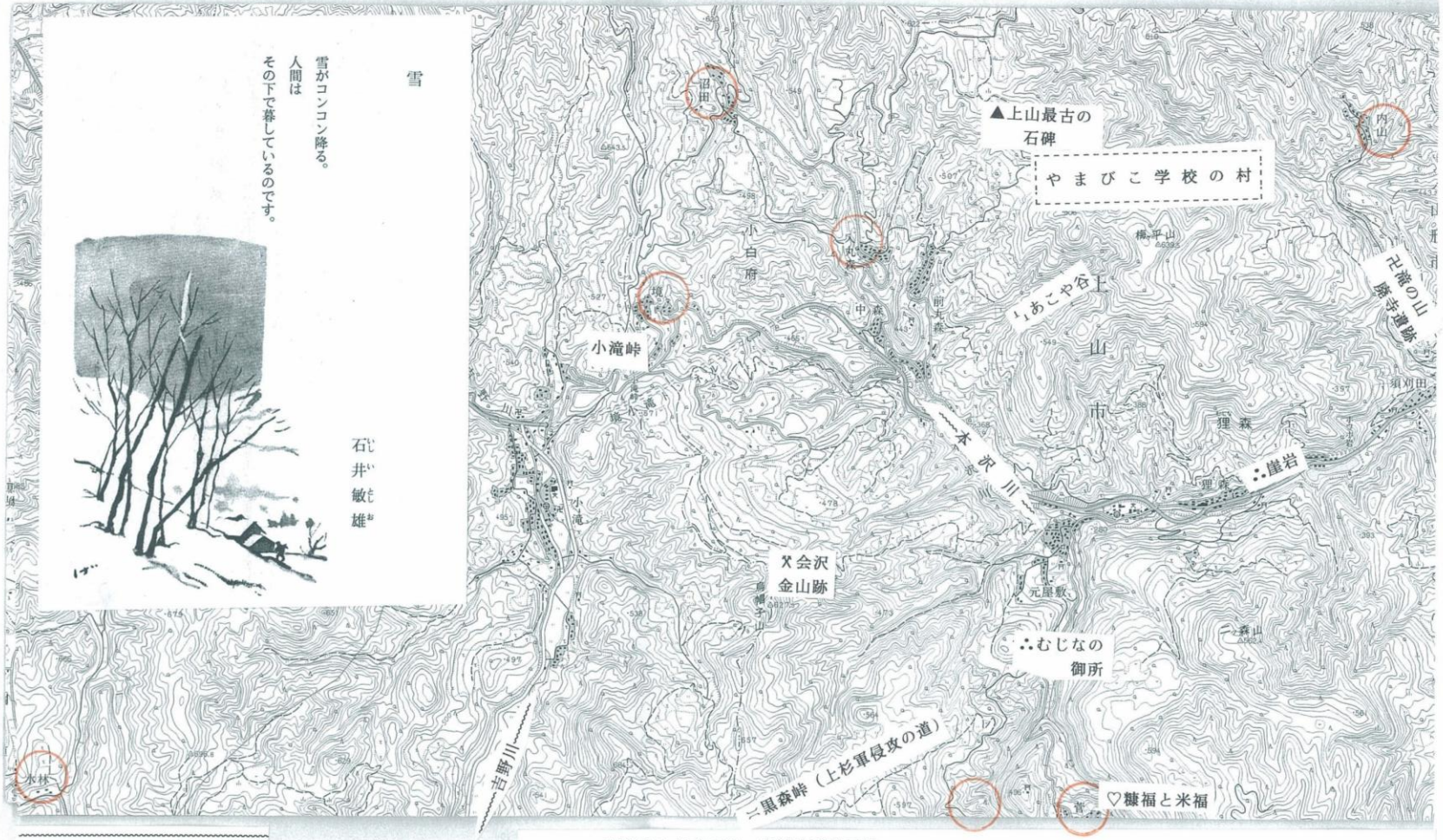


②吉田橋

雪

雪がコンコン降る。
人間は
その下で暮しているのです。

石井敏雄



やまびこの村

昭和３１年までは、南村山郡山元村。

戸数３００、人口２０００というのが昭和中期の山元村の村勢だった。

以後半世紀、村の変貌は著しく、山間の集落は次々と廃村となるか、あるいはいわゆる限界集落となりつつあり、その動きは止どまる気配がない。

しかし、村には住む人たちの作りあげた長い歴史と、美しい連帯がある。これをより確かなものとする方策はなにか。村が再び力を取り戻すために、国家社会はなにをなすべきだろうか。

山びこ学校

無着成恭編

ほんものの教育をしたいという願いから，社会科を手がかりにして，生活綴方の指導をおこなった山形県山元村中学校の教師，無着成恭(1927－)が，その成果をまとめた詩・作文集(1951年刊)。いまなお読む者の心を強く打たずにはおかない克明でひたむきな生活記録。戦後の教育に大きな影響を与えた。(解説＝国分一太郎・鶴見和子)

青 199-1
岩波文庫

上ノ山の美しい娘